

セッション K 事後報告

沖縄の〈現在〉を思想史からとらえかえす—歴史、現在、そして新たなる世界史へ

森 宣雄

本セッションは、2009～10年にかけて、日本の内政外交にわたる一大争点となった米軍普天間基地移設問題など、いわゆる「沖縄問題」を、思想史の文脈から検討する主題を掲げた。

まず世話人の森宣雄（聖トマス大学）が、配布資料「問題設定：沖縄の日本国政参加 40年と世界、未来」に即した趣旨説明を行なった。2010年という年は、ちょうど沖縄が日本の国政に参加して40年に当たる。第二次世界大戦後の日本国家の安全保障体制およびそのもとの国益と、沖縄における「県益」が対立矛盾する事態にどう思想的に向き合い、展望を描いていくか。この思想的問題はいま現在問われている難題であると同時に、また、戦後沖縄の思想史を貫通する問題でもあった。一方には沖縄と日本の断絶や差意識から沖縄独自の（擬似）民族的主体を立てる思想と運動があり、他方には何らかの普遍主義にもとづいて連帯を世界にひろげていこうとするそれがあった。森の「問題設定」では、こうした沖縄の土着的主体と普遍的連帯の両面を総合するかのよう、40年前の国政参加の前後に、沖縄中部地区反戦青年委員会の活動家、松島朝義によって提起された「沖縄人プロレタリアート」の思想／運動を紹介し、その思想的潮流が、現在の党派的主体を持たない県民大会の移設反対運動につながっているのではないかと、問題を提起した。

つづいて長元朝浩（沖縄タイムス）が、「沖縄戦後史の核心は社会運動である」（森宣雄『地のなかの革命—沖縄戦後史における存在の解放』現代企画室、2010年）との指摘を引き取りながら、戦後沖縄の社会運動と思想の歴史をあらためて振り返る報告を行なった。以下にその趣旨を摘記する。戦後沖縄の社会運動には3つの軸があった。第1は、自分たちは何者か、「日本人」になるということをめぐる大卒の帰属問題、第2は、教育・環境・自治・労働などの個別課題をめぐる運動、第3は基地と安保をめぐるそれ。これらはからみ合って1つの運動を作っていたが、とくに第3の基地問題が、現在の社会運動の中軸となっている。それは朝鮮戦争、ベトナム戦争、冷戦終結がそれぞれもたらした転機をふまえて、2009年ついに「パンドラの箱が開く」段階にいたった。沖縄においては、冷戦終結後、たとえば一方では、「日の丸」を引き降ろそうとするヤマトンチューを沖縄の人間が止めたり、また他方では、高里鈴代氏などの女性による運動のインパクトもあり、従来は国家論的で政治主義的なきらいのあった基地問題を、基地がもたらす被害をめぐる生身の暮らしの問題としてとらえなお機運が定着し、これを背景として保守と革新が穏やかに歩み寄り連携できる体制が成熟してきた。そのうえで、沖縄が日本国家のありようを正面から問う運動が可能になった。これにたいして、日本の政府は、沖縄の基地が何のためにあるのか曖昧にしか説明できないまま、米軍任せの日本防衛と、沖縄への基地押しつけを続けてきた。日本のマスコミも同様で、いま日沖の世論はかつてないほど乖離している。そのなかで沖縄の政治的独立を危惧する日本の世論も増え、また沖縄に独立を勧める日本人も増えている。だが独立を言うならば、アメリカが作ったレジームのなかにいる日本社会の独立こそ先に論じるべきである。ともあれ、沖縄は、東アジアの連携や対等な安保など、当面の争点をかいく

ぐりつつも、「軍事に頼らない世界秩序」と、そこにおける「沖縄問題」の解決にむけて、一步ずつ、歩みを進めていく。そこに希望がある。

以上の問題提起と報告を受けて、討論者の崎山政毅（立命館大学）は、第 1 に社会運動の歴史における質的变化について、どの個別課題から始めても別の何かにつながり、個別のものがからみ合って「世界」が問題になる状況にいたっているとして、万能薬はないが、しかしつながり合いのあり方が問われていることを指摘した。また第 2 に、金とドルの兌換停止など冷戦の展開にも大きな影響を与えてきた、軍事における経済の要素が、さらに前景化してきている状況が、現在の海兵隊再編問題の背景にあることを指摘し、第 3 に、そうした世界像と経済のつながり合いという問題状況の指摘に即して、数知れず虐げられてきたラテン・アメリカの先住民社会でアウトノミア運動、閉じないで開いてゆく自己統治が試みられてきた事例を紹介し、沖縄の自立論と共通する側面がそこに見出せることを論じた。

次に討論者の富山一郎（大阪大学）は、日本社会における沖縄研究の歩みを振り返り、かつては「なぜ沖縄を研究するか」根拠を示せといわれてきたのが、現在は安直な根拠を見いだして沖縄が語られるようになったという変化があるが、そこには、ヤマトの人間にしみ付いた領土的、地政学的な思考が共通して見られるとして、それが現在の沖縄側からの県外移設論の提起に対する、ヤマトの安直な批判の背景にあると指摘した。そして主権という概念を無批判に前提視する者が、主権国家をパズルのピースのようにして東アジアの秩序をコントロールしようとしてきたのにたいし、戦後沖縄の社会運動／思想家たちは、たとえば林義巳が満州経験から奄美、沖縄、朝鮮半島まで連帯の視野を広げ、あるいは永丘智太郎もハワイやパラオに散らばった沖縄人を視野に入れ、本島だけが沖縄ではないという視座に立つなど、領土的思考をこえたところで運動と思想を展開してきたことを指摘し、「社会運動が沖縄を構成してきた」というテーゼでいうところの「沖縄」とは、領土的な意味での沖縄本島や沖縄県のことではなく、地政学上にはないかもしれない、ある種のユートピアであるのだと論じた。

このあとセッションはフロアとの質疑応答をふくむ「全体討論」に移り、軍事と経済の問題、尖閣諸島問題、ヤマトに生きる研究者の「語り口」のあり方の問題、主体・自己と領土・ユートピアの問題など、多岐にわたる討議が行なわれた。詳細は紙幅の制約もあり紹介できないが、包括的かつ奥行きのある、長元氏の卓抜な報告が、歴史をふり返る土台となることで、限られた時間内での多岐にわたる討論も、空中戦に浮つくことなく話し合うことができた。もう一点、40 年前に「沖縄人プロレタリアート」論を提起し、現在は陶芸家の松島朝義氏も討論に参加され、労働・生産と所有の関係をめぐる論点から尖閣諸島の領土問題を考える問題提起がなされたことを、特に付記しておく。